

A. ピペルノ著「反ユダヤ・プルースト」を読む

著者	小山 尚之
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	5
ページ	55-61
発行年	2009-03-27
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000344/

[資料]

A. ピペルノ著『反ユダヤ・ブルースト』を読む

小山 尚之*

(Accepted November 21, 2008)

Reading of *Proust antijuif* written by A. Piperno

Naoyuki KOYAMA

Abstract: In his book *Proust antijuif*, Alessandro Piperno professes that Proust, in *A la recherche du temps perdu*, treats cruelly his Jewish characters like Swann, Bloch or Rachel, and that he accuses them of their mimicry. But Piperno's argument seems to be unilateral. Because Proust is cruel not only to Jews but also to aristocrats. This article is a summary of Piperno's book but criticises its immature hastiness at the same time.

Key words: Marcel Proust, Alessandro Piperno, *A la recherche du temps perdu*, Swann, Bloch, antisemitism, mimicry

序

本稿は以下の書物に関する書評ならびに注釈である。

Alessandro Piperno, *Proust antijuif*, p.221

traduit de l'italien par Franchita Gonzalez Batlle

Edition Liana Levi, 2007

原著はイタリア語で2000年に出版されている。筆者が読んだのはフランス語による翻訳であることをまず断っておく。

この書物の著者アレッサンドロ・ピペルノは、1972年ローマ生まれ。現在はローマにあるトル・ヴェルガタ大学 l'université de Tor Vergata でフランス文学を教えている。

ブルーストはカトリックの父、ユダヤ人の母の息子である。彼はキリスト教の洗礼を受け、父と同じくカトリックである。これと反対にピペルノは、ユダヤ人の父、カトリックの母の息子だそうである。ピペルノはこの『反ユダヤ・ブルースト』によって著作を開始し、2005年には『最悪の意図をもって』 *Avec les pires intentions* という書物を公刊している。現在のイタリア文学における神童と『反ユダヤ・ブルースト』の裏表紙に紹介されている。

筆者はブルーストの研究者ではない¹⁾が、クロード・ランズマンの映画『ショアー』を観て以来、ヨーロッパにおける反セム主義 antisémitisme (日本語訳では反ユダヤ主義と訳されることが多いが、反ユダヤ主義には antijudaïsme という語があるので、あえて反セム主義と訳す) に関心を抱いている²⁾。その筆者の目にピペルノの本のタイトル『反ユダヤ・ブルースト』が飛び込んできた。幾分スキャンダラスなそのタイトルにつられて筆者はこの本を早速手に取り読

んでみた。以下はピペルノの著作の概略を紹介するものであり、またそれにたいするコメントである。但しこの論考の論述の順序は、ピペルノの著作における論述の順序にかならずしも従っていないことを、あらかじめことわっておきたい。それはより明快な記述にするために筆者がとった選択の結果である。

感情的な主体から冷徹な観察者へ

ブルーストの、青年期の習作『ジャン・サントウイユ』から『失われた時を求めて』(以下『失われた時』とする)への生成変化のあいだには、語りの質の変化が存在していることは誰しもが認めている。ところでピペルノはこの変化を共感から残酷さへの変化ととらえている。彼はこの変化の交差点をブルーストの草稿の一部である1908年の手帳に認めている。この手帳には「呪われた種族」(ユダヤ人と同性愛者のこと)というテキストが書き込まれており、それはのちに『失われた時』のなかの「ソドムとゴモラ」へと転用されている。ところで手帳のテキストには聖書への言及とともに弁舌口調の悲壮さがあるのに対して、『失われた時』ではテキストの調子は根本的な変容を蒙り、むしろ滑稽さのほうに赴いているのである。それはちょうどドレフュス事件にたいする語りの口調が、『ジャン・サントウイユ』から『失われた時』へ移行する間に変容しているのに呼応している³⁾。悲壮さから滑稽へ、共感から残酷さへ、あるいは熱狂から無感動へという、この語りの変化は何を意味するのか。

* Department of Marine Policy and Culture, Faculty of Marine Science, Tokyo University of Marine Science and Technology, 4-5-7 Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科)

ブルーストの置かれていた状況

この語りの変化の原因を突き止める前に、まずブルーストが作家としてみずからを自覚するさいに、自身のなかのユダヤ人の血をどのように認識していたのかという問題がある。ブルーストの父はカトリックであり、ブルースト自身もキリスト教の洗礼を受けている。だがピペルノは言う。ブルーストの魂には早い時期からユダヤ人問題が現前していた、と。その証しに、ピペルノは、ブルーストがロベール・ド・モンテスキュー（シャルリュス男爵のモデルのひとり）に宛てた手紙を引用する（1896年ブルースト25歳）。〈昨日あなたがユダヤ人について私にお尋ねになった時、私は返事をしませんでした。それはとても単純な理由からです。私は父や弟とおなじくカトリックです。これにたいして母はユダヤ人なのです。これが、このようなジャンルの議論を私が控えております非常に強い理由であることはご理解いただけるでしょう。〉ブルーストはみずからの出自において母方からのユダヤ人の血が流れていることに自覚的であった。

つぎにブルーストの生きていた時代における社会的な動向がある。啓蒙時代を経て、フランス大革命の折に、ユダヤ人は解放され、彼らに一般市民と同じ資格があたえられた。このときからそれまでは潜在的であったいわゆるユダヤ人問題が顕在化する。一部のユダヤ人の西ヨーロッパ社会への同化がはじまり、ロスチャイルドのようなユダヤ人は社会的にも経済的にも高い地位にまで登りつめる。このことにたいする反感から、反セム主義的な言説も多く産み出されるようになる。フランスにおいて反セム主義はドレフュス事件（1894～1899）のさいに沸騰する。上に掲げたロベール・ド・モンテスキューへの手紙はドレフュス事件が起こった2年後であることは意識すべきであろう。モンテスキューは反セム主義者であった（『失われた時』のシャルリュス男爵もそうである）。モンテスキューだけでなく、ブルーストが出入りしていたフランス貴族の社交界は反セム主義的であった。

ピペルノは、19世紀末から20世紀初頭にかけての、富裕なユダヤ人家庭の子弟たちの野心を、ハンナ・アーレントの記述を借用しながら説明している⁹⁾。親の世代において経済的な成功がある程度収められたのちに生まれた若いユダヤ人たちにとって、貴族社会という上流社会に受け入れてもらうことが理想となった。若きブルーストももちろんこのような野心に鼓舞されていたに違いない。しかし受け入れてもらいたい相手の側は反セム的だったのである。

韜晦・隠匿の傑作

『失われた時』は一筋縄で解読できる代物ではない。『失われた時』以前に書かれていた未刊の『ジャン・サントウイユ』にはドレフュス事件の影が色濃く残っている。実際、

若きブルーストはドレフュスのために父と論争し、ユダヤ人作家であるアナトル・フランスの署名を得る運動さえしていた⁹⁾。そのことは『ジャン・サントウイユ』の主人公ジャンが、ピカール大佐によせる熱狂にもあらわれている。ピカール大佐は心の底からの反セム主義者だったが、真理への愛のためにドレフュスを擁護する。しかしピカール大佐のような人物は『失われた時』のなかにその場を見い出さない⁷⁾。

『失われた時』においてドレフュス事件は、ユダヤ人と貴族たちのあいだの会話の種となるが、事件そのものは直接的には言及されなくなる。また『失われた時』の話者はドレフュス派にもつかず、反ドレフュス派にもくみしない。その登場人物たちの見解も、堅固で一定したものではない。ユダヤ人でありながら最初はノン・ポリであった審美家スワンは、その死の間際にドレフュス派となる。当初ドレフュス派であった青年貴族サン・ルーは逆に後年、反ドレフュス派となる。反セム主義者であったゲルマント公爵夫妻はスワンの晩年にドレフュス支持にまわる。『失われた時』においてドレフュス事件は、事件と当事者そのものは背景にしりぞきながら、それに関する社交界での会話が習慣のようなものとして記録されているにすぎない、とピペルノは言う⁸⁾。

つまり『ジャン・サントウイユ』から『失われた時』にいたるあいだに、語りの審級の変化がおこっているわけである。このような変化をピペルノは次のように解釈する（そしてここがピペルノ独自の視点であろうと思われる）。ブルーストは、青年期におけるドレフュス事件へのみずからの政治的コミットメントを過ちと判断していた⁹⁾。また彼は、おのれの中のユダヤ性、同性愛、スノビズム、あるいは自身が社会的に無価値であることに、あきらかに恥の感覚を抱いていた¹⁰⁾。そこでブルーストは、『失われた時』において、自身は「話者」という中立的な審級にしりぞきながら、みずからのなかで恥じている部分を分解し、断片化し、それを『失われた時』の数多くの登場人物たちにばら撒いた。しかもそのような恥部の断片は、登場人物たちにある一定の性格を与えるためではなく、むしろそれらの登場人物たちの性格が矛盾し、相反するように散種されているのである¹¹⁾。『失われた時』はユダヤ人と同性愛者に関する直截的な表現というより、それらの韜晦と隠匿の傑作である、とピペルノは断定する¹²⁾。『失われた時』の話者は、人間的感情を犠牲にしてまでも、ユダヤの大義にも貴族にも与せぬ、中立的な、冷徹なものとしてふるまう。そしてピペルノによれば、ブルーストが、自身が恥と考えているさまざまな特質を、数多い登場人物のなかに矛盾した形で撒き散らしているがゆえに、ブルースト自身は「ユダヤ的なもの」le judaïsme にたいしてどのような立場に立っているのか、はっきりと確定し同定することは極端に困難になっている、という¹³⁾。

にもかかわらず『失われた時』に出てくるユダヤ人たち

にたいして、ブルーストは残酷である、とピペルノは判断する。彼は、『失われた時』を読んださいに読者をうつのは、そのテキストの「嬉々とした残酷さ」 la joyeuse cruauté「残忍さ」 la férocité である、と指摘する¹⁴⁾。そこから、「反ユダヤ・ブルースト」 Proust antijuif という本書のタイトルが生まれているわけである。

ユダヤ人たちの蒙る仕打ち

『失われた時』には、貴族社会に出入りする野心をもった4人のユダヤ人が登場する。スワン、ブロック、女優のラシェル、そして話者（あえて言えば）である。スワンはすでにゲルマント侯爵夫妻に受け入れられているが、高級娼婦と結婚したために、その妻と娘の出入りは拒まれている。ブロックは話者の同級生で、サン・ジェルマン街に出入りすることを願う作家志望の青年。ラシェルはゲルマント夫妻の息子サン・ルーの恋人であり女優。そして話者はサン・ルーやシャルリュス男爵を介してゲルマント家との親交を期待している。このように、一方には社会的上昇を願う富裕なユダヤ人たちがおり、他方には反セム主義的な貴族社会がある。このような構図は『失われた時』だけに見られるものではない。ムージルの『特性のない男』におけるウルリッヒとラインスドルフ（反セム主義の貴族）、シュニッツラーの『黄昏のウィーン』におけるユダヤ人ハインリッヒと貴族ゲオルクの交友と対立にもみられるものである¹⁵⁾。

このような立場に立たされたとき若きユダヤ人たちはどう振舞うのか？ その場合、ユダヤ人の子弟たちはみずからの出自を隠蔽あるいは忘却し、相手の側（上流貴族社会）が価値あるものと認めているものをどんなものであれ真似るのである。オーストリアのことではあるが、ハンナ・アーレントは、貴族に受け入れられたいと願う、そのような若き裕福なユダヤ人たちの様を、こう記述している（ピペルノはこのアーレントのテキストに言及しているにすぎないが）。《いくらかなりと詩を作れる若者はみな若きゲーテを気取り、少し絵心があれば未来のレンブラントを装い、音楽の才ある子弟は魔神的なベートーヴェンを演ずるといった按配である。そしてこうした神童たちの親に教養があれば、真似の方もそれだけ行き届いたものになった。その物真似はへたな詩作だけに限られず、個人的な生活のありとあらゆる細部にまで及んだ。ゲーテにならぬ超然たることを自負し、彼のように「悠然と」政治に背を向けたり、高名な故人がかつて手にしたものならどんな切れっぱしでも収集し、あるいは現在活躍している著名人なら誰とでも個人的な知り合いになろうとした¹⁶⁾》。物真似、あるいは擬態、もしくは偽装。これが反セムの貴族社会に受け入れられるために若きユダヤ人たちがとった手段であった。擬態・偽装は彼らにとって防御の武器であり、また成功を確保するものであった、とピペルノは言う¹⁷⁾。

ブルーストがこの擬態の名手であったことは言うまでも

無かろう（彼の習作としての偽作のかずかずをみよ）。だがこのような擬態に明け暮れしていれば、自然と政治的にはどっちつかずの態度となり、曖昧な立場に位置することになる。そのような曖昧さの犠牲になったのがシュテファン・ツヴァイクである、とピペルノは言う¹⁸⁾。政治には無頓着な、洗練された優雅な文化人。ツヴァイクはナチスの反ユダヤ政策をまえに自殺するにいたるが、ツヴァイクの姿に幾分かはスワンの姿も重なると、指摘されている¹⁹⁾。

ところで、反セム主義的言説が主張するユダヤ人の欠陥こそ、まさにこのユダヤ人の擬態・偽装の能力なのである。ピペルノは、1850年にリヒャルト・ワーグナーが偽名で出版した最も反セム主義的なパンフレット『音楽におけるユダヤ性』を挙げている。そこでは、詩人ハイネ、音楽家メンデルスゾーンらが、剽窃の廉で告発されているのである。ワーグナーは言う。メンデルスゾーンはシューベルト、シューマンをコピーしているにすぎない。ユダヤ人は芸術の絶対的精神を俗なものにして広めることしかできず、絶対的精神そのものには決して到達しない。また幽遠な深みもユダヤ人には無縁である。彼らは表層的でしかない、とワーグナーは断罪する²⁰⁾。高みも、深みもユダヤ人には禁じられている。19世紀の著名な思想家、たとえばマルクス、ミシュレなどにとっても、ユダヤ人とは、低俗、皮相、俗物主義の同義語であった²¹⁾。

ピペルノの解釈では、ブルーストは、『失われた時』において、おのれを何事にも動じない冷徹な「話者」として昇華しながらも、ただたんにシャルリュスに代表されるような社交界のなかの反セム主義的言説を積み重ね、記録するだけでなく、みずからすすんで反セム主義的紋切り型に沿ってユダヤ人を残酷に扱っている、という。《ユダヤ人の条件にたいする彼の同情は彼のなかでは信じがたく反セム主義と共存している》（本書 p.80）。たとえばブロックにたいする話者の語りである。貴族のサロンにおけるユダヤ人の役割は、貴族のオリエンタリズム趣味を満足させることである。にもかかわらずブロックはおのれのオリエント出自を忘れ、偽ホメロス調で大言壮語し、サン・ルーと違って騒々しく、人の気に障る。ユダヤ人でありながら当時の社交界の風を真似て反セム主義的な冗談すらとばす。その後ブロックは、名前もユダヤ的なブロックから、ジャック・デュ・ロジエとフランス風に改名し、いくつかのサロンに出入りするようになる。話者には、ブロックの、フランス社交界のさまを模倣しようとする擬態・偽装が快く思われない。この不快はワーグナーのそれと重なっている、とピペルノは主張する²²⁾。ブロックだけではない。スワンも、ラシェルも擬態の名人であり、奥深さが無い。

オリエントという源を隠蔽し、完璧な西ヨーロッパのダンディとして振る舞おうとするユダヤ人たちの擬態・偽装に関連して、シャルリュスのような反セム主義者であり真正主義者たちは、ユダヤ人たちは物真似を止めてみずからの根源的真正さに戻るよう努めるがよい、と進言する（こ

れは『特性の無い男』に登場する貴族ラインスドルフが共有する意見でもある)。話者もまた同様の視点のもとにブロックを非難する。ブロックは偽ホメロス調の大言壮語をルコント・ド・リールにまかせて、初源の真正さに戻るべきである。ブロックだけでない。サン・ルーもそうだ。話者はドレフュス事件にたいするサン・ルーの積極的関与を愚かだと失望する。またサン・ルーの愛読書がブルードンとニーチェであることを知り話者は怒りすら感じる。話者はマルサント公爵の回想録を読む導きをサン・ルーに期待していたからである²³⁾。

スワン Swann という「名前」が蒙る運命

『失われた時』には、土地の「名前」、人物の「名前」にたいする、聖書的・ユダヤ的ともいえる特別な愛着・執着・こだわりがある。その中でイギリス起源のユダヤ名「スワン」という名前にブルーストは残酷な懲罰を与えている、とピペルノは主張する²⁴⁾。話者にとって「スワン」という名前は最初は音だけで存在する。やがてその音は母の話者へのキスを妨害する悪夢と結び付けられる。話者はスワンの娘ジルベルトと親密になる。ジルベルトは、ヴァントウイユの娘がその父を苦しめているのを非難しながら、一方で祖父の命日に話者と芝居に行こうとするような忘恩のそぶりを見せる。ジルベルトの母オデットは、スワンの死後、スワンの恋敵フォルシュヴィル公爵と結婚する。フォルシュヴィルはジルベルトをみずからの子どもとして認知し、ジルベルトはフォルシュヴィルを「パパ」と呼ぶ。誰もスワンと発音するものではなく、ジルベルトは手紙の末尾に G. S. Forcheville と署名するようになる。ある少女がジルベルトに本当の父親は誰なのかと意地悪く尋ねた時、ジルベルトは「スワン」と発音する代わりに「スヴァン」と発音する。イギリス起源の名前をドイツ風に発音したわけだが、この一瞬のあいだに加えられた発音の変更には、ユダヤ人の父にたいするジルベルトの羞恥が窺える。その後ジルベルトはサン・ルーと結婚することになる。その知らせを電車のなかで話者とその母が聞いた時、母は、ジルベルトはスワンがあればゲルマント家に紹介したがっていた娘だったから、その娘がゲルマント家の一員になるなんて、きっとスワンも幸せに違いない、と言う。話者は憤慨して反論する。スワンという名前ではなくフォルシュヴィルという名前で祭壇におもむく娘をどうしてスワンが喜ぶだろうか、と。しかし最後にはジルベルトとサン・ルーの間に生まれた娘が、今度はゲルマントという名前を下げることになる。ジルベルトの娘は無名の文学者と結婚するからである。ジルベルトの娘の世代の者たちにとって、ジルベルトの娘の先祖がそれなりに羽振りが良かったことを想像するのが困難になった時、スワンとオデット・ド・クレシという名前が奇蹟的に蘇る。

ピペルノによれば、ジルベルトがスワンという名前を裏

切っていくこと背景には、ブルーストが母方のヴェイユ Weil という名前を裏切り、忘却しようとする欲望があるからであるという。ピペルノは言う。《ブルーストがこの名前(スワン)にこれほどの屈辱を課したのは、我々が見逃しているひとつの意味が疑い無くある。我々はここに、彼によればあらゆる不幸の原因と看做されている彼の本性の一部分を破壊しようとする欲望をみることが出来る。その部分とは、彼の母という遠く深い場であり、ユダヤ人という場である。この部分が前もって彼の差異を決定し、彼を同性愛にしたのである(「呪われた種族」とは等しくユダヤ人と同性愛者のことである)。》(本書 pp.123-124)

スワンその人の描き方の残酷さ

名前だけでなくスワンその人を描く筆致も残酷である、とピペルノは述べる²⁵⁾。スワンは最初は洗練された社交人であって、決断・選択とは無縁の趣味人であった。だが晩年にいたってドレフュス派となりユダヤ教に回帰する。すると彼は繊細で鷹揚な人物から、しつこくて野暮な人間に変化し、ドレフュスその人に似るまでになる。そのスワンについてたとえば『失われた時』ではこう描かれている。《しかしスワンは滑稽な盲目さを示していた。(……)。彼は自分の崇拜と軽蔑すべてを、ドレフュス擁護という新しい基準で試練にかけていた²⁶⁾。》《ある種のイスラエルびとの内面には、人生の決められた時間に、あたかも舞台におけるがごとく登場できるように、舞台袖で控えている、下品な人間と預言者が残っている²⁷⁾。》『失われた時』の話者にとって、ひとつの陣営につくつかないかは、あるサロンでは受け入れられ、別のサロンでは排斥されるという意味しかない。どれほど崇高な大義であれひとつの理念に全身全霊をこめて身を捧げるのは下品なのだ。『失われた時』においてはラシーヌやコルネイユ風な荘重さにはかならず滑稽がともなっている。たとえば、ゲルマント邸のエントランスホールで、久々に話者と再会したスワンが、愛・嫉妬・ユダヤ教・反セム主義などについて高揚した調子で述懐している場面に、ブルーストは、あたかも『ボヴァリー夫人』の一場面のように、シャルリュス男爵がシュルジス兄弟を誘惑しようとする色漁りの場面を対置させているのである。またゲルマント公爵夫妻がついにドレフュスの無罪を支持するにいたった際にスワンが流した涙にたいしてさえ、話者は次のように切り返す。《スワンは忘れていた。その日の午後、彼は私に反対にこう言っていたのだ。このドレフュス事件に関する世論なるものは遺伝によって決定されているのだ、と²⁸⁾。》ピペルノはブルーストの、いずれの立場にもくみしないこのような冷たさにたいして、次のように反論する。《我々は彼の良き信念にたいして疑義をさし挿まざるを得ない》(本書 p.188)。

ピペルノによれば、『失われた時』は破滅へとむかう世界をニヒリスティックに書きとめたものであり、究極的で不

動の本質や永遠のアイデンティティを捉えることのできない曖昧さと矛盾のなかで、揺れ動くことだけを唯一の誠実さと心得て揺れ動いているものなのである²⁹⁾。

プルスは反ユダヤなのか？

以上がピペルノの著書の概略である。全体を概観してみても思われるのは、ピペルノの議論はさほど説得的ではない、ということである。確かにこの本によって蒙をひらかれた部分はある。特にスワンという名前が被る運命を跡づけた箇所は、ユダヤ人の父をもつピペルノならではの視点であり、新鮮であった。またスワンのようなユダヤ人のタイプが、当時の西ヨーロッパにおいては、シオニズムの創始者テオドール・ヘルツルやドイツ教養主義的なシュテファン・ツヴァイクといった人物のなかにも認められるという点は、興味深いところであった。さらにワグナーの反セム主義的パンフレットを、プルス、さらにはユダヤ人たちの擬態の能力と結びつけたところは面白く読めたことも事実である。

また、実際プルスの『失われた時』には、さまざまな登場人物による反セム主義的な言説が多く書き留められている。それはハンナ・アーレントがその著『全体主義の起源』において、19世紀末のフランスにおける反ユダヤ主義を実証するものとして、プルスの小説から多くを引用していることから分かることである。

にもかかわらず、そのことからプルスを反ユダヤであると推論するのはいささか性急であると思われる。何故なら、ピペルノが言う、プルスのユダヤ人にたいする残酷さ、その残酷さは、同じように、サン・ジェルマン街のフランス貴族たちにも向けられているからである。

プルスが17世紀のサン・シモン公爵の『回想録』を手本としていたことはよく知られている。ところでサン・シモン公爵は、ルイ14世をこきおろすほどの辛辣な毒舌家で知られている。そしてプルスもサン・シモン公爵ばりにサン・ジェルマン街の貴族たちに諷刺的な視線を向けているのである。ハンナ・アーレントの言を借りれば、プルスは、「*社交界の証人および告発者*³⁰⁾」でもあった。

たとえば話者の最大の憧れのまどであったゲルマント公爵夫人についてすら、次のような厳しい評価がくだされている。「*ゲルマント夫人が私の文学の精神に寄与するのは、彼女がサン・ジェルマン街について語るときであるのに対し、彼女がひとたび文学の話をするとき、これほど愚かなサン・ジェルマン街の姿はないと思われるくらいであった。*³¹⁾」また彼女の夫ゲルマント公爵の、浮薄な軽佻ぶりも容赦なく記述されている。仮装舞踏会に行きたくてたまらぬゲルマント公爵は、親戚のオスモン侯爵が亡くなったと知らせを聞いた時、以下のような信じられない発言をする。「*オスモン氏の死が知らされたときから、彼の目には例の期待した仮装舞踏会ががらがらと崩れ去るのが見え*

た。けれどもたちまち気を取り直すと、二人の従姉にこんな言葉を投げつけたが、そこには快楽を諦めまいとする固い決意とともに、フランス語の言い回しを正確にもののできない彼の無能さがこめられていた。「*亡くなったって！まさか、大げさだ、大げさすぎるよ。*」³²⁾」身内の死をも省みず快楽を選択するのはなにもジルベルトだけではないのである³³⁾。また倒錯的快楽の亡者とも言うべきシャルリュス男爵には脳卒中という運命が待っている。病のために社交界の寵児から落魄し、廃残の身をさらすシャルリュスを話者はこう記述する。「*このとき男爵は（たとえ私の耳が慣れたことを勘定に入れても）その言葉をいちだんと強く吐き出していた。ちょうど悪天候の日の上げ潮が、小さな波をもみくちやにしてぶつけるように。そして最近の発作の名残りは彼の言葉の奥底に、小石のころがるような響きを残していた。*」³⁴⁾」ここに話者の冷徹さ、残酷さはないだろうか？

プルスは、反ユダヤではなく、脱ユダヤ化したユダヤ人であり、アイザック・ドイッチャーが、スピノザからハイネ、マルクス、ローザ・ルクセンブルク、トロツキー、フロイトと系譜づけた、「非ユダヤ的ユダヤ人」に連なるひとりであると思われる。ドイッチャーによると、「非ユダヤ的ユダヤ人」とは次のような人々である。「*かれらはすべてユダヤ人社会の限界をのり越えていった。かれらはすべてユダヤ人社会があまりにも狭量で、古くさく、圧制的なものを宿していると感じた。（……）この人々はすべてユダヤ人でありながら、異なる文明、宗教、民族文化等の境界線上に立っている（……）またかれらは各時代の転期の境界線上に生まれ育っている。かれらは（……）みんな社会に属していながらその社会には受け入れられていない。かれらにその社会を越え、民族を越え、時代や世代を超えた高い思想をもち、広い新しい地平にその精神を飛躍せしめ、またはるかの未来にまで考えをすすめることを可能ならしめたのはまさにこの点であった。*」³⁵⁾」プルスはたしかに完全なユダヤ人とはいえないが、母方のヴェイユ家とのつきあいから、ユダヤ人社会を熟知していた者のひとりであろう。彼はユダヤ的なものに引かれる（たとえば母や祖母を熱愛する）と同時に、その限界を認識しそれを乗り越えようとしていたのではないか。

ピペルノはプルスを反ユダヤであると言う。それでは例えばプルスと同時代を生きたフロイトを、比較として検討してみよう。フロイトの場合はプルス以上にユダヤ的であった。何故ならフロイトの両親もユダヤ人、妻もユダヤ人だったからである。そのフロイトがナチスの迫害を受け、ロンドンに亡命し、安楽死を選択するまでに書き綴った最後の論文が『人間モーゼと一神教』である。この論文でフロイトは、モーゼはイスラエルびとではなくエジプト人であり、イスラエルびとによって殺害された、と主張した。この主張は後年、ひとりのユダヤ人であり、イェール大学教授でもある、イェルシャルミによって反論

される³⁶⁾。モーゼはイスラエルびとによって殺されはしなかったと。この反論は、ある意味でフロイトの議論が、ユダヤ人にとって反ユダヤ的な響きをもっていることの証左となっている。イェルシャルミによるフロイト批判は、ピペルノによるブルースト批判とパラレルなものになっている。フロイトの推論も、ブルーストの筆致も、ユダヤ人の側からすれば反ユダヤ的な残酷さをもっているのであろう。

ブルーストは閉鎖的な貴族のサロンに受け入れられることを切望し、それをある程度まで実現したが、その環境に安住することなくむしろ嘲弄的・批判的なまなざしを貴族たちに向け、同時にドイツチャーの言う「非ユダヤ的ユダヤ人」として、フロイトのように、ある種のユダヤ的なものを普遍的なものへと乗り越えようとし、人間の根源的な本質を見い出そうと努めていたひとりであったと思われる。そのような彼を指して単に反ユダヤと言うのは、一面的にすぎると言わざるを得ない。

ピペルノが言うブルーストの残酷さは、「ユーモア」（フロイトの言う意味での³⁷⁾）ととらえるべきではないだろうか。時にそのユーモアが残酷に映るとしたら、それはそのユーモアがスウィフト的なブラック・ユーモアだからである。このようなユーモアあるいはブラック・ユーモアは、ブルーストだけに孤立した例ではなくカフカの作品などにも見い出せるものである。

このようなユーモアを残酷と解釈するピペルノの生硬な若さは、彼が、究極的な本質・永遠不動のアイデンティティ・決定的肯定というものを求めているその素振りのなかにも認めることができる³⁸⁾。ピペルノの読解は、斬新な切り口をもっているがその分析はやや性急であり、ブルーストにおける人間的な温もりの欠如、人間的な感情の欠如を嘆くその論調はむしろ彼自身の読者としての未熟さを露呈していると思われる。

註

- 1) 筆者はアンドレ・ブルトンに関して研究している者であり、マルセル・ブルーストの専門家ではない。しかしブルーストの『失われた時を求めて』を時折は繙き、愛読してきた者である。とはいえブルトンとブルーストのあいだには懸隔がありすぎるのではないか、と思われる向きもある。かたや反体制のアヴァン・ギャルド。かたやコルク張りの部屋に引き籠り社交界の記憶を紡ぐ作家。しかしブルトンとブルーストの間にまったく接点がないわけでもない。ブルトンがダダ運動に参加し、医学部の授業に身を入れなくなった頃、そのことに恐れをなしたブルトンの両親はブルトンへの仕送りをいっさい止めてしまった。パリでブルトンの面倒をみていたポール・ヴァレリーが早速ブルトンに生活費を得る手立てを見つけてくれる。それはガリマール社での雑用と、ブルーストの部屋で『ゲルマントの方』の校正刷りを朗読するという仕事だった。生活の不如意に当惑していたブルトンは、一時期ブルースト邸で書き込みや付箋のついた校正刷りを朗読するようになった。(H. ベアール、『アンドレ・ブルトン伝』、1990年、塚原史、谷正親訳、思潮社、1997年、pp.111-112) だがブルトンとブルーストのあいだ

に特別な交流があったわけではない。筆者自身のことに戻ると、これまで筆者は漠然と、ブルーストにおいてなにかが終わり、ブルトンにおいてなにかが始まる、というようなはっきりとした根拠もないヴィジョンをもっていた。このなにかは明瞭に定義できないが、文学、芸術、思想、政治など広汎な領域における、世界観あるいは倫理性のようなものである。ブルーストはやはり19世紀の人であり、ブルトンは20世紀を引き受けた人である。そのような観点から筆者はブルーストとブルトン双方を読んできた。

- 2) ブルーストとブルトンを通じて、終わりもせず、始まりもしないものがある。反ユダヤ主義である。その起源は遠く古代ヘレニズム期からと言われているが、反ユダヤ主義はヨーロッパの歴史とともにつねにその影の部分としてあった。ブルーストの生きていた頃はドレフュス事件が起こり、反ユダヤ主義、国粋主義が高まる一方、ユダヤ人の側ではシオニズム運動が盛んになった時代であった。ブルトンの生きた時代、反ユダヤ主義は頂点を極め、ナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺があった。ブルーストとブルトンの生きた時代に伏流する反ユダヤ主義。この反ユダヤ主義を、ブルースト、ブルトン以後に正面から論じ、批判した知識人が、ジャン＝ポール・サルトルである。クロード・ランズマンはサルトルの弟子すじにあたる。彼は現在、師のサルトルが創刊した *Les Temps Modernes* 誌の編集長をつとめている。
- 3) A. Piperno, *Proust antijuif*, Liana Levi, 2006, pp.133-144
- 4) *Lettre citée in Proust antijuif*, op.cit., p.31
- 5) *Proust antijuif*, op.cit., p.75
- 6) *ibid.*, p.137
- 7) *ibid.*, p.141
- 8) *ibid.*, p.142
- 9) *ibid.*, pp.143-144
- 10) *ibid.*, pp.12
- 11) *ibid.*, p.40
- 12) *ibid.*, p.12
- 13) *ibid.*, p.42
- 14) *ibid.*, p.13
- 15) *ibid.*, pp.69-71
- 16) H. アーレント、「昨日の世界のユダヤ人」『パリアとしてのユダヤ人』に所収、原著1943年、邦訳1989年、未來社、藤原隆裕宣訳、pp.116-117
- 17) *Proust antijuif*, op.cit., pp.76-77
- 18) *ibid.*, pp.72-73
- 19) *ibid.*, pp.74
- 20) *ibid.*, pp.53-56
- 21) *ibid.*, pp.50-51
- 22) *ibid.*, pp.75-81
- 23) *ibid.*, pp.64-67
- 24) *ibid.*, pp.91-121
- 25) *ibid.*, pp.159-169
- 26) *ibid.*, p.163
- 27) *ibid.*, pp.164
- 28) *ibid.*, pp.169
- 29) *ibid.*, pp.173-206
- 30) H. アーレント、『全体主義の起源』、tome 1, 反ユダヤ主義の起源、原著1951年、邦訳1993年（初版1972年）、みすず書房、大久保和郎訳、p.157
- 31) M. ブルースト、「ゲルマントの方Ⅱ」in『失われた時を求めて』、原著1921年、邦訳2006年、集英社文庫、鈴木道彦訳、p.393
- 32) M. ブルースト、「ソドムとゴモラⅠ」in『失われた時を求めて』、原著1921年、邦訳2006年、集英社文庫、鈴木道彦訳、p.274

- 33) この辺の議論は、鈴木道彦著『ブルーストを読む』集英社新書、2006年、p.97～101 記述を参照した。
- 34) M. ブルースト、「見出された時 I」 in 『失われた時を求めて』、原著 1927年、邦訳 2006年、集英社文庫、鈴木道彦訳、p.356
- 35) I. ドイツチャー、『非ユダヤ的ユダヤ人』、原著 1968年、邦訳 1970年、岩波新書、鈴木一郎訳、pp.35-36
- 36) Cf. Yosef Hayim Yerushalmi, *Freud's Moses*, Yale University Press, 1991
- 37) S. フロイト、『ユーモア』、原著 1928年、邦訳 1969年、人文書院、高橋義孝訳、pp.406-411
- 38) *Proust antijuif*, op.cit., pp.199-202

A. ピペルノ著『反ユダヤ・ブルースト』を読む

小山 尚之

(東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科)

要旨： 『反ユダヤ・ブルースト』という著作において、アレッサンドロ・ピペルノは次のように主張している。ブルーストは『失われた時を求めて』のなかで、スワン、ブロック、ラシエルといったユダヤ人の登場人物を残酷に扱い、彼らの擬態を非難している、と。しかしピペルノの議論は一面的であるように思われる。何故ならブルーストはユダヤ人に対してだけでなく、貴族に対しても残酷だからである。この論文はピペルノの本の要約であるが、同時にその未熟な性急さを批判してもいる。

キーワード： マルセル・ブルースト、アレッサンドロ・ピペルノ、『失われた時を求めて』、スワン、ブロック、反セム主義、擬態

